

コ ラ ム

科学万博寸見寸評

子供達に付き合つて、つくばへ1泊2日の旅行を敢行した。その体験と感想を御参考までに。

1. 華麗な映像と音響の祭典。かつて、偏光眼鏡を使った立体映画と称するものを観たことがある。その時のチャチな映像という印象は、執拗に迫る太刀の刃先や槍の穂先にギクリとし、投手の手元を離れて一直線に飛んでくる剛速球から思わず身を避けてしまった鉄鋼館の映像の迫力や童話の世界にひきずりこむ住友館の大らかな立体映像の前に、完全にぬぐい去られたことは確かである。他の館の各々趣向を凝らした出し物も、童心に帰りさえすれば、十分に楽しめる。ただし、その20分余りの錯覚を楽しむには、2時間の待ち時間を費やす事を気にしない度量が必要である。

2. 連続プロセスの有効性。会場に入つての第1印象は、人の数と行列であつた。長蛇の列に埋没しながら、商売柄観察し得たことは、大量処理における連続

プロセスのバッチプロセスに対する優位性がここでも立証されていたことである。観客が入口から乗物などで出口へ移動させられる間に、映像が次々と変化する、くるま館、三菱未来館、IBM館などの連続処理方式は、1回ごとに観客の総入れ替えをするバッチ式のNEC、鉄鋼、住友館などに比べ、観客処理数に大差があり、相対的に待ち時間も短いようであつた。

3. 21世紀における先端とは？ 科学博が21世紀を垣間見せるものであるとして、あの壮大なる時間の浪費は何を意味するのだろうか。エレクトロニクスやロボット技術の粋を集めて情報や物の生産性を極限に高めても、それで得たレジャーの中味、精神燃焼の密度が稀薄になつたのでは悲しい。主流を外れ、人影の密度のより小さな外国館を訪ねると、そこには又別の世界がある。たとえば、西独別館のコラーニによる曲線美の数々。個性の量産といつたことが、現在の外挿線上に実現できるのだろうかと感じた次第です。

(東北大学選鉱製錬研究所 徳田昌則)

編集後記

第110回講演大会が近づいた。創立70周年記念の日本鉄鋼協会史に最近20年間の講演大会発表数の推移が載っているが、この間の鉄鋼界のあゆみを想いつつ興味深く眺めた。

わが国の粗鋼生産量は昭和48年にピークに達し、この年のオイル・ショックを機に、その後の伸びは停滞している。

一方、講演大会発表数はこの頃から急増し、昭和58年度には春、秋合わせて1500件に達し、10年間で2倍強の伸びとなつている。この間の協会会員数には大きな変化はないので、会員当たりの発表件数が大幅に増えたことになる。ちなみに、ここ数年では正会員100人当たり年間15件前後の発表数となつている。

部門別でみると、昭和48年頃から製鉄、製鋼部門

と加工、材料部門の関係が完全に逆転し、後者が大幅に上まわるようになったこと、ここ数年は加工部門の伸びが著しいこと、などが注目される。

オイル・ショック以来の必死の企業努力、周辺技術の進歩、革新との連動作用等が反映されているものと容易に推察される。

第109回大会から、時代の流れに対応して“萌芽・境界技術”の新設を含む新しい部門構成となつたが、各部門とも活況を呈していた。

発表件数の多さは、それ自体にはさまざまな評価があると思うが、少なくとも旺盛な開発意欲の現れであろう。量と共に質のいつそその充実を伴つた大会の発展を願念するものである。

(R.H.)